

心，体，環境をループする Robert Frost の詩

坂本 季詩雄

〈Summary〉

Imagination is created in a loop to connect mind, body, and environment. Science and mind are closely connected through the Western science history. Since René Descartes has divided mind and matter into dichotomy, many of the modern scientists still grasp the world in his way. Robert Frost was consistently against this idea through his career as a poet. The poet's art and philosophy lead to the unity of mind and matter.

以前筆者は「Frostにおける“Something”——精神と現実の狭間での創造」と題する拙論において、次の様に考えた。

「“something”という語は単独では漠然とした抽象性しか表さない特異な語である。そのためコンテキストの網でからめ取ることによりどんな意味の座標も取ることが出来るのである。しかし、この座標とは精神と現実の相対性の中にぼんやりと認識されるにすぎない。抽象的なことを抽象的語“something”であらわすことは、詩人の頭脳の中に閃光のようにひらめいた考えを、その微妙なとらえがたいニュアンスを生かしたまま読者に提示するには有効な手段になり得る。」(坂本 31)

フロストの詩作にとって“something”は重要な単語であろう。第一詩集から最終詩集まで、140回近くこの単語を使っている。

Others taunt me with having knelt at well-curbs
 Always wrong to the light, so never seeing
 Deeper down in the well than where the water
 Gives me back in a shining surface picture
 Me myself in the summer heaven godlike
 Looking out of a wreath of fern and cloud puffs.
Once, when trying with chin against a well-curb,
 I discerned, as I thought, beyond the picture,
 Through the picture, a something white, uncertain,

Something more of the depths — and then I lost it.
 Water came to rebuke the too clear water.
 One drop fell from a fern, and lo, a ripple
 Shook whatever it was lay there at bottom,
 Blurred it, blotted it out. What was that whiteness?
 Truth? A pebble of quartz? For once, then, something.
 (Frost 208)

この作品中で something は “Truth? A pebble of quartz? For once, then, something.” とのべられ、特定されえない、言語化されえないものとされる。

精神と物質とが共存し関連し合うことにより、二つの人間的事象、宗教と科学は生み出される。この二つは、デカルト的には全く相容れないものと考えられている。今回、“something”をこの二つを共に生み出す人間だけがもつクリエイティビティとイマジネーションをシンボライズするものとして捉え直したい。なぜならこの言葉は「もの」である“thing”を人間が認識して初めて人間的領域の存在“something”になるからだ。そして、フロストは宗教と科学の中間領域に位置してきた魔法、魔術による物語を私たちに示そうとしているのだと考えたい。経験から切り離された空想的であるが、不可思議な身の回りのことを合理や論理により裏付ける物語が、フロストのいう“Truth? A pebble of quartz? For once, then, something.”で表現しようとした世界であると考ええる。

“Education by Poetry”というフロストのエッセイの次の発言は、彼の理想とした詩が二元論的思想の統一の場所であることを物語っている。

Greatest of all to say one thing in terms of another is the philosophical attempt to say matter in terms of spirit, or spirit in terms of matter, to make the final unity. That is the greatest attempt that ever failed. We stop just short there. But it is the height of poetry, the height of all thing, the height of all poetic thinking, that attempt to say matter in terms of spirit and spirit in terms of matter. (Frost 723-24)

さらにフロストは科学に対してアンビバレントな気持ちを持っていた。一つは科学を賞賛する気持ちである。「人間の未来」というシンポジウムでそのことを語っている。“It [science] is man’s greatest enterprise. It is the charge of the ethereal into the material. It is our substantiation of our meaning.” (Frost 870, “The Future of Man”, unpublished version)

一方、オルダス・ハクスリーがのべるような、科学が物理的自然を完全に支配し、その支配力が人間の精神領域へも広げられ、その上で描かれる理想郷的世界にフロストは大いなる不信の念

を持っていたことをスタンリスは指摘している。

for science in its totality, the ultimate goal is the creation of a monistic system in which . . . the world's enormous multiplicity is reduced to something like unity, and the endless succession of unique events of a great many different kinds get tidied and simplified into a single rational order. (Stanlis 322)

スタンリスは著書で、フロストが二元論的に、物質と精神の関係を捉えていたことを述べている。その根拠としているのが Arthur O. Lovejoy (1873-1962) の著書『二元論への反逆』である。スタンリスが目にするのは、ラヴジョイがデカルトの考えを誤りだと捉えている点である。スタンリスはラヴジョイの次の一節を引用し、デカルトの方法論や哲学の不備を指摘している。

If Descartes has been as critical and methodical in rebuilding his world as he was in shattering it, he would have seen that the existential proposition which in his reconstruction, should have immediately followed the *cogito ergo sum* [I think, therefore I am] was *memini ergo fui* [I remember, therefore I have been]. . . if he had taken it, the history of modern philosophy might well have been widely different from what it has been, and less involved in confusion. For any belief in the possibility of true remembrance is not only a step out of subjectivism, it is also a step into epistemological dualism (Lovejoy, 380-81)

ここで紹介しているラヴジョイは、アメリカ哲学史の中で、物質と精神を分離不可能なものとして、二元論的に捉えることで、現代科学が依って立つデカルト的な思考を乗り越えようとした革新的な考えをもたらした人物と考えられている。柏端はラヴジョイの重要性を次のように述べている。

アメリカの哲学史叙述、思想史叙述の伝統を語るさいにアサー・O・ラヴジョイに言及しないことは、おおよそ考えられない。ラヴジョイとその後継者達の仕事は、アメリカの哲学史研究および思想史研究において現在に至るまで一つの（唯一のではないにせよ）きわめて重要な流れを形成している。(柏端達也 434)

また、この点をアントニオ・R・ダマシオ¹⁾は、2005年に出版した著書 *Descartes' Error/ Emotion, Reason, and the Human Brain* のなかで、デカルトを引用しながら、身体と心は不即不離の関係に在り、デカルトがそのような関係を壊してしまったとのべている。2000年代においても、科学はデカルト的な考えの上に成り立っていて、自分のような立場を取る研究者は数少ないという。

そのことから私は、私が一つの実体であり、その全本質ないし本質は考えることであること、そしてその存在のためにいかなる場所も必要ではなく、またそれはいかなる物質的なものにも依存していないことを知った。またそれゆえこの「我」、つまり、私を私たらしめている精神は、身体とは完全に別のものであり、後者よりずっと認識しやすいものであること、そしてたとえ身体がないとしても、精神は精神たることをやめないことを知った。

これがデカルトの誤りである。すなわち、身体と心の深淵のごとき分離。大きさがあり、広がりがあり、機械的に働き、かぎりなく分割可能な身体と、おおきさがなく、広がりがなく、押すことも引くこともできない、分割不可能な心との分離、理性、道徳的判断、そして身体の痛みや情動的激変に由来する苦しみが、身体から離れて存在するという考え。心のもっとも精緻な作用の、生物学的有機体の構造と作用からの分離。(ダマシオ 376-77)

心と体、精神と物質は二元論的につながった存在であるという考え方が、徐々に科学の世界に広がってきている。その科学の歴史をたどってみると、実は科学と疑似科学（科学のようなもの）のボーダーライン上に魔法が位置してきたことがわかる。魔法は人間のクリエイティビティとイマジネーションが生み出した心の産物である。そのことを科学哲学という分野において見てみよう。

科学哲学という分野には、科学と科学のようで科学でないといわれる疑似科学との間の「線引き問題」が検討されている。線引きの目安は次の様なものだ。

「科学でない」ものは、現代の物理学、化学、生物学などの誰もがみとめる正統科学に否定されている分野を指す。

この観点からすると、精神分析が仮定する心の深層構造はぎりぎり科学の側に分類されるだろう。創造科学 (creation science)、占星術、超心理学、中国医学などはそれぞれ神による個別の種の創造、惑星の位置と地上の出来事の因果関係、超能力の存在、気の流れによる人体の説明など、とても正統科学の考えと一致しないような主張をしているので疑似科学に分類することになる。(伊勢田 6)

「科学のようで」という分野は、その分野の研究者が自分たちの研究を科学的だと主張したり、その主張に科学的な装いをまとませたりしている場合が該当する。地縛霊や前世の記憶に関する主張も、上のような条件が整えば疑似科学と言える。経験を伴わない単なる空想の産物である物語は、科学かどうかという議論の俎上に上げるわけにはいかないようだ。

科学と疑似科学の違いのボーダーラインは微妙で、明確に識別するのが難しい。現在、科学と考えられていることも、10年先にはその科学理論に誤りが見つかることもあるからだ。絶対的だとされたニュートン力学を否定することになったアインシュタインの一般相対性理論は、現代の

物理学を支配している。また、古くはいわゆる創造科学 (creation science) は、ダーウィンの『種の起源』が現れる前には、それなりに科学的とされていた。1925年のアメリカ、テネシー州で起きたスコプス裁判、いわゆるモンキー裁判で、進化論を学校で教えることを禁じる法律に抗議して、生物学の教師、スコプスが進化論を教えたため、訴えられ有罪となった事件がある。進化論が科学かどうか争われた結果、進化論を教えるはいけない州が存在することになった。

このような考え方の延長線上では、疑似科学と分類されている占星術は天文学との間で線引きが微妙である。占星術は中世ヨーロッパでは魔術とされていた。さらに現在では、魔術は独自の理論に基づく知的な営みであると考えられてもいる。ハリー・ポッターは魔法学校で魔法を学問として身につける。

魔術の中に占星術や錬金術が含まれることはつとに知られている。占星術は紀元前2世紀、アリストテレス、プトレマイオスにより基本的な考えが生まれ、メソポタミア、ギリシャ、イスラムを経由してヨーロッパへと受け継がれた知識である。ある人の生まれた瞬間の天体の動きから、その人の運勢を読み取るというものだ。そのために星の正確な動きを観測し、宇宙のことについて知る必要が生じた。人の運勢を決めるには、星座、12宮（牡羊座、牡牛座というような）のどこに、生まれたときの太陽の位置が来るか（ホロスコープ）が基準になる。そして、星座や星（プラネット）には象徴的な意味が与えられていることが重要である。ここには人間の想像力による、経験を離れた飛躍が見られるからだ。

この占星術がおもしろいのは、西欧科学の根本を生み出すことに貢献した点だ。占星術は11・12世紀にはキリスト教に組み込まれる。天界が神の領域で、天使が星を動かしており、人々の運命を司るという論理が考えられる。この世界において占星術師のコペルニクス（1473-1543）は、16世紀に地動説を唱えることになり、現在の天文学を創始する。その後ヨハネス・ケプラー（1571-1630）は精緻な観測をもとに、「天体の運動は楕円である」ことを発表する。ケプラーは神秘思想を信奉しており、「神と太陽を同一視し、宇宙の数学的調和の中に神のメッセージを探そうとした」。 (伊勢田 68) ケプラーの発見はニュートン（1643-1727）の力学発見を促す。しかし、ニュートンもまた神秘思想を信奉しており、錬金術の実践家、研究者であった。数学や力学を片手間として、錬金術の研究に打ち込んでいたのである。

天文学、数学、力学という誰もが科学と疑わない領域を生み出したのが、占星術師ケプラー、錬金術師ニュートンなのである。

つぎに“Kitty Hawk”というフロストの晩年の作品を通じて、彼が個人的、アメリカ的、人類的視点から精神と物質を融合して捉えていることを見る。

フロストがこの作品で、精神と物質が不即不離の関係にあると示したとスタンリスは指摘する。人間世界のあらゆるものは、人間の情念や欲動が創造したと指摘するのだ。

Frost extended the phrase to include evolution and history, seen as involving spirit and matter, as the central theme in “Kitty Hawk.” By identifying “passionate preference” as “a Biblical

thing,” the poet expanded its meaning beyond biology and politics to include ethics and the spiritual realm of religion and even the creative power of man that included art, science, and the evolution of civil society from primitivism to eternity. (Stanlis 293)

“Kitty Hawk” 冒頭で、語り手はノースカロライナの大西洋岸の海岸キティーホークを訪れる。ライト兄弟が人類史上初の飛行を行った場所で、若き日に当地を訪れたとき “initial flight” をしたことを回想する。これは語り手の魂の中へ、未知の崇高な物への飛翔だった。時が数え切れない砂丘の砂粒と同じように時を刻んできたことと重ねられる。悠久の歴史と個人史と人類の歴史の融合する風景なのだろう。“Off these sands of Time /Time had seen amass /From his hourglass.”

i. It was on my tongue
 To have up and sung
 The initial flight
 I can see now might —
 Should have been my own —
 Into the unknown,
 Into the sublime
 Off these sands of Time
 Time had seen amass
 From his hourglass.

二つ目の引用部分では、語り手へ舞い降りた詩的インスピレーション “Muse” は詩の形象 “a figure of speech” をもたらす。大空という空間を彼の詩的言語が埋め尽くすことを予想する。それは将来、ライト兄弟以降多くの飛行機が空を自在に飛び回ることと重ねられる。

語り手がかつてこの地を訪れたとき、ライト兄弟が飛行の実験をする以前だったことを重ねることで、人類の飛行機による飛翔は夢の段階だったことが強調される。古くはレオナルド・ダ・ヴィンチ (1452–1513)、近くはオットー・リリエンタール (1848–96) などの先達が、自由な飛翔を夢見続けてなしえなかった。イマジネーションは未だ科学へと昇華されていなかったのだ。彼らは失敗を重ね、実験を繰り返し、とうとう飛行機を開発する。同じように、詩人である語り手は、キティーホークを訪れたことにより、詩人として生きることを決意し、言葉により彼の世界観、精神を創造し始める。ライト兄弟にとって科学の力で物理的空間を飛翔することと、語り手が創造力により魂の世界を飛翔することが並列的に語られる。

When the chance went by
 For my Muse to fly

From this Runway Beach
 As a figure of speech
 In a flight of words,
 Little I imagined
 Men would treat this sky
 Some day to a pageant
 Like a thousand birds.
 Neither you nor I
 Ever thought to fly.
 Oh, but fly we did,
 Literally fly.

飛翔は次の引用では下降する動きとして捉えられる。ニュートンの万有引力がリングの落下から発見されたように、神が肉体へと降臨することで、the supreme meritが実体化すると語られる。“That the supreme merit /Lay in risking spirit /In substantiation.” 錬金術師のニュートンのことが次の一節から思い起こされる。“Westerners inherit / A design for living / Deeper into matter / Not without due patten / Of a great misgiving.” 西欧人は物質の中に住まう意図を受け継いでいる、おおきな懸念に対する決まり文句を得て、科学が欲し、あらゆる物を物質化すること“To materialize”がはじまる。これは科学と魔術が同根であっても、科学を使い人々を啓蒙してきた西欧文化と重ね合わされる。この“that fall / From the apple tree”には、科学的世界を支配してきたニュートンの重力の発見と共に、聖書のリングにまつわる墮落も暗示されているのであろう。

宗教と科学の境界線がぼやけ、デカルト的に分離されてきた世界観が融合する。神が肉体に降臨することは、精神を実体化させることであると語られる。さらに、精神が肉体へ入り込むことは、神の子がキリストとして受肉することと同一視される。同じように魂が人間の形象に入り込み、魂を持つ人間が地上に満ちる。

Pulpiteers will censure
 Our instinctive venture
 Into what they call
 The material
 When we took that fall
 From the apple tree.
 But God's own descent
 Into flesh was meant
 As a demonstration

That the supreme merit
 Lay in risking spirit
 In substantiation.
 Westerners inherit
 A design for living
 Deeper into matter
 Not without due patter
 Of a great misgiving.
 All the science zest
 To materialize
 By on-penetration
 Into earth and skies
 (Don't forget the latter
 Is but further matter)
 Has been West Northwest.

最後の“All the science zest / To materialize / ... / Has been West Northwest”の行で、科学志向の西洋文明が世界中を支配していることが語られる。その志向は中東やエーゲ海から西北西に向かって広がっている。“Then for years and years / And for miles and miles / 'Cross the Aegean Isles, / Athens Rome France Britain, /Always West Northwest,”

この世界観は、デカルト的な精神と物質を分離して捉える考え方を表してはいない。フロストの世界観では、精神と肉体、魂と物質との融合が図られている。“our human part / Of the soul's ethereal /Into the material.”

Spirit enters flesh
 And for all it's worth
 Charges into earth
 In birth after birth
 Ever fresh and fresh.
 We may take the view
 That its derring-do
 Thought of in the large
 Was one mighty charge
 On our human part
 Of the soul's ethereal

Into the material.

魂と物質の融合は、ライト兄弟の発明した飛行機の飛翔のイメージ“The Leap”で表現される。ケネディ大統領が1962年に、人類を月に送り込むと述べたように、ナビゲーションの歴史は大気圏を越え、宇宙や月面へと広がっていった。この点をスタンリスは次の様に述べている。

He believed that the Wright brothers' invention of the airplane was more than a scientific achievement. It was also an instrument of man's future history. It advanced the new world discovered by Columbus. It extended man's power over physical nature behind earthly limits into outer space. (Stanlis 307)

ただし、たとえ飛翔が宇宙へと広がっていても、人間が創造的営みをするのは地球上においてである。

As have I not written,
Till the so-long kept
Purpose was expressed
In the leap we leapt.
And the radio
Cried, “The Leap-The Leap!”
It belonged to US,
Not our friends the Russ,
To have run the event
To its full extent
And have won the crown,
Or let's say the cup,
On which with a date
Is the inscription though,
“Nothing can go up
But it must come down.”
Earth is still our fate.

思考する人間に許されているのは、物と接触したり、視界に入れたり、かいだり、味わったり五感を使いながら、体の中、思考の中に取り込むのだ。そして、それは地上で常に行われる。経験的なことであれ、空想的なことであれ、全ては地上で行われる。飛翔した飛行機がいつ螺旋状に

舞い降りることが必要であるように。“Nothing can go up / But it must come down.” / Earth is still our fate.“

科学も宗教も、地球上にいる人間の創造的営みから生まれたものである。ケプラーが、楕円を描きながら天体は太陽の周りを回っていることを発見したのも地上での出来事である。考えることにより、人間は自身の世界を生み出してきた。ケプラーの発見がなければ、楕円軌道で衛星は太陽の周囲を回るという事実は存在しないも同然なのである。

Till we came to be
 There was not a trace
 Of a thinking race
 Anywhere in space.
 We know of no world
 Being whirled and whirled
 Round and round the rink
 Of a single sun
 (So as not to sink),
 Not a single one
 That has thought to think.

次の引用箇所では、フロストの信念が表現される。部分で全てを、全てで部分を提喩的に表現することにより、思考を言葉で表現できる。比喩的に表現されたフロストの世界は、この作品についてスタンリスが指摘するように様々な事象へと読者の思いをはせさせる、詩を読むことが魂の飛翔となっているかのようなのだ。これは二元論的な魂と物質の融合がもたらす、フロストの魔法、魔術的な仕業だと言えるだろう。

We may get control
 If not of the whole
 Of at least some part
 Where not too immense,
 So by craft or art
 We can give the part
 Wholeness in a sense.
 The becoming fear
 That becomes us best
 Is lest habit ridden

In the kitchen midden
 Of our dump of earnig
 And our dump of learning
 We come nowhere near
 Getting thought expressed.

次の引用部分の、機械で出来た神はサタンである“God of the machine . . . is Satan”という表現は、神だけではなくサタンもいなければ、キリスト教世界は存在しないことを表す。1945年の仮面劇“A Masque of Reason”で“The Devil’s being God’s best inspiration”とヨブの妻に述べさせている。神（善）から悪魔（悪）が生まれるように、悪から善も生まれるという二元論をすでに表していた。“Kitty Hawk”でも、精神は物質と、物質は精神と共にあることにより、ライト兄弟の発明は具現化され、人間の世界を別の次元へと引き上げる。Darius Greenは“Darius Green and the Flying-machine”という1860年代にJohn T. Trowbridgeが書いた詩に出てくる主人公だ。ダ・ヴィンチやオットー・リリエンタールのように、彼は“Darius was clearly of the opinion / that the air is also men’s dominion.”と、飛翔することの将来像を思い描いていた。しかし、ライト兄弟のように、飛翔を実現する機械を創ることは出来なかった。ライト兄弟の成功は、人類の長年にわたる飛翔への欲望があったからこそ可能になったのだ。

God of the machine,
 Peregrine machine,
 Some still think is Satan,
 Unto you the thanks
 For this token flight,
 Thanks to you and thanks
 To the brothers Wright
 Once considered cranks
 Like Darius Green
 In their home town, Dayton.

ライト兄弟のおかげで、人類は空を飛ぶという長年にわたる夢を実現できた。それは、ニュートンが述べたことで有名になったフレーズ“If I have seen further, it is by standing on the shoulders of giants”で述べたことと同じことが起きているのだ。「精神の観点から物質を語り、あるいは物質の観点から精神を語り、最終的に統一を図ろうとする哲学的試み」をフロストはこの作品の中で行っているといえるだろう。

注

- 1) ダマシオ (1944-) ポルトガル生まれの神経学者。ハーバード大学で行動神経学を研究し、現在南カリフォルニア大学 Brain and Creativity Institute 所長。

参考文献

- 1) Frost, Robert, Richard Poirier, Mark Richardson ed., *Collected Poems, Prose and Play*, Library of America, New York, 1995.
- 2) Lovejoy, Author O., *The Revolt against Dualism*. New Brunswick, NJ: Transaction Publishers, 1996.
- 3) Stanlis, Peter J. *Robert Frost, The Poet as Philosopher*, Wilmington, Delaware: ISI Books.
- 4) 伊勢田哲治『疑似科学と科学の哲学』名古屋大学出版会, 2003年。
- 5) 柏端達也「観念の歴史の時代区分 — アサー・O・ラヴジョイとアメリカ観念史学派」, 渡邊二郎監修, 『西洋哲学史観と時代区分』昭和堂, 2004年。
- 6) 坂本季詩雄「Frostにおける“Something” — 精神と現実の狭間での創造」『愛知工業大学研究報告』No. 24, 1989.
- 7) ダマシオ. アントニオ・R. 田中三彦訳『デカルトの誤り』*Descartes' Error/Emotion, Reason, and the Human Brain*, ちくま学芸文庫 2005.